



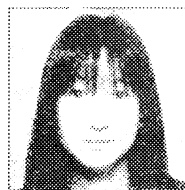
セッション2

華麗なるバリ島の楽園

マリ・クリステイーヌ (コミュニケーター) (左)

河合徳枝 (国際科学振興財団) (中)

原島博 (東京大学) (右)



原島：これから、第2番目のセッション、華麗なるバリ島の楽園というテーマで行かせていただきます。午前中のセッションが、濃密なる映像宇宙ということで映像をたっぷり使ってかなり強烈なセッションだったので、それに対抗するにはどうしたらいいかと。ビジュアル系あるいは環境系に対してこのセッションはどちらかという風俗系というか、悪い意味でないですよ、良い意味での風俗系なんで、まさにバリ島になりきってやろうということでこういう趣向を、さっき思いついてこういう風に致しました。

こういう格好をすると、今気がついたんですが結構気持ちいいですね。気持ち良いというのはですね、まずこの並びが良い。これ、どう考えたって結婚式の披露宴ですよ。いわゆる、高砂という席があって、その横に二人いる。日本だと一人しか有り得ないんだけど、二人いるというのは非常にヒンズー的で僕は大好き。河口君とか廣瀬君は家族を連れてきたんですが、僕は一人で来た、という意味があったという風に思っています。

これからの進め方なんですけども、普通、披露宴というのはここに居る人は何も喋らないで、むしろゲストの人が2人について話すということなんですけど、あまりそういう事ばかりやってると、こちらばかり盛り上がってしまっ、特に僕だけが盛り上がってしまっ、会場の方がしらっということになると思いますので、それなりに普通のやり方で進めさせていただきます。

それでは最初にお二人、新婦と言っはいけないのかな、お二人を紹介させていただきます。お手元のパンフレットにあると思いますが、みなさんから向かって右側がマリ・クリステイーヌさんです。みなさん良くご存じだと思いますが、本人、ご専門はコミュニケーターということで、世界の色々な人達、文化のコミュニケーションという物を色々

とデザインしていこうということなんです。生まれは、日本、4歳まで日本ということですが、その後、ドイツ、アメリカ、イラン、タイということで、7カ国後に精通している。日本語が何番目なのかというのを昨日聞いたんですが、ちゃんと答えて頂けなかった。たぶん6番目くらいじゃないかなー、と思っております。バリ、日本、あるいは他の国々を比較しながらこれからを考えるということで、今日来ていただきました。

それから河合徳枝さんですが、先ほどバーチャルというのは実質的とか事実上のとかいうので、アメリカのバーチャルプレジデントがヒラリーだという話なんですけど、私の見るところ、河合さんはバーチャル芸能山城組会長だと思っます。仁科さんと2人でバーチャルな会長をされて、大橋先生は単にそれに乗っかってるだけということですよ。

仁科さんと河合さんは、それぞれうまい分担をされていて、仁科さんがどちらかという科学的な方、河合さんが文化人類学的な方を分担して、非常に良い調和になっております。今日はバリ島の華麗なる楽園ということですので、バリがなぜ華麗なのかということをお話して頂きたいと思っます。それからもう1つ。昨日ガムランをご覧になったと思っますが、河合さんご自身がいわばバリ舞踊の名手ということで、東京外国語大学等でも教えておられます。特に僕が河合さんの踊りで好きなのは、昨日レモンラッサムというのがありましたね。3人で踊るんですが、その真ん中の子がすごく可愛かったですよ。あの子可愛いと思ってあの子ばかり見てたんだけど。あの役を河合さん、お得意です。また別の何か魅力とか色気とかですか、出してもらえる。特に、あの役をやってる河合さんの後姿が僕は大好きで、これ以上言うとも本人嫌がるかもしれませんので。たぶん、そのうちにその後姿を

見られる機会が皆さん出て来るんじゃないかという風に思っています。

ということで、今日はこの3人で始めたいという風に思っていますが、僕もちょっと自己紹介をしなければいけない。こっちにですね、何か僕の肩書きが顔情報学という風になってるんですが、これは確か前の屋久島の時に仮面を被って出た時、何を専門にしたらいいかと行った時に、仮面を被るんだったら顔情報学というタイトルでということで、それがそのまま出てしまいました。今回はやっぱり顔の話は別に1つもするつもりはないので。さっき河口君から話がありましたけれども、先週屋久島に行って今週末こちらに来ているから、離島情報学、何かそういうようなタイトルが専門になろうかと思っています。

ちょっと話が飛びますけども、先ほど河口君が屋久島にハブをヘリコプターからたくさんばら撒くと良いと。それによって屋久島は変わるんだという話をしたんですが、僕もその時に付け加えてした話があります。河口君はそれを無視して言ってますが、僕が言ったのは、ハブなんて撒く必要はないと、河口洋一郎を裸にして20匹山に撒けば、これで屋久島は変わると。何しろ遺伝子が非常に強い人ですから、屋久島は昔から、猿2万、鹿2万、人2万、と言われている、そういう島なんですけれども、そこで屋久島の新たな何か種ができるんじゃないかなと思っています。こんな話ばかりしてはいけません、ちゃんと入りたいと思います。

このテーマ、華麗なるバリ島の楽園ということなんですが、この、華麗なるバリ島の楽園でこれから何を3人でディスカッションしようかということです。今回のテーマ、最初が濃密なる映像宇宙ということで、いわばバリ島の環境という物を、それを映像という物にどこまで映し込めるかという、そういう話だったと思います。2番目はどちらかという、バリ島の生活というか、先ほど風俗という言い方をしましたけれど、風俗も含めた生活という物を考えて、それをどこまで我々が実現することができるか。3番目はたぶん、もっと人間側に入って行って人間の内側の精神世界に入って行くという、そういう3つの構成になっているわけです。

この2番目のセッションが、華麗なるバリ島の楽園ということなんですが、ここで実はこのタイトルで重要なのはバリ島のということで、このタイトルをですね、濃密なる映像宇宙も含めて、このタイトルは確かいつだったかな、河口洋一郎君の部屋で酒を飲みながら勝手に決めたんですが、今考えると非常に良く付けられたタイトルです。まずですね、華麗なるバリ島の楽園ではない。バリ島の楽園

だったらバリ島の話だけになってしまって遠くの方に楽園がある、それはすばらしいなあ、それはユートピアだなあ、ということになってしまう。ところが、バリ島の付いた段階で、これはもしかしたらバリ島的なものは日本でも実現しようと思えばできるかも知れない。バリ島というハードウェアは日本には無いけれども、バリ島的というソフトウェアは日本でも実現できるかもしれない。

ではそのソフトウェアとしてのバリ島的というのは一体何だろうか、というのをまず考えてみたいという風に思っています。そのバリ島的な物はなぜ華麗なのか、なぜ楽園なのかということ、これは考えるより体験したほうが早いんで、みなさんもう2番目は分かりきってるという風にお思いになるかも知れませんが、一応、順序としてなぜそれが楽園なのか華麗なのか。そしてバリ島的なものが日本を含めた近代社会において可能なのか。バーチャルという意味を仮想という風にとってしまうとそれは単なるユートピア、バリ島はユートピアでしかないわけですが、それが実質的なとか事実上のということで見ると、もしかするとバリ島を近代社会で実現できるかも知れない、ということ、そういう所まで行ければという風に思っています。

この中でバリ島的というのは一体何なのかということなんですが、やはりバリ島には色々なものが組み合わさっています。まず何と言ってもバリにはいい自然があります。昨日の雨もバリの自然ですし、その自然によってもたらされるおいしい食べ物、果物は特においしいですけれども、それも自然であります。その自然の中で人が生きて来たということが歴史ということになります。そういうバリの歴史という物を振り返ることによってバリ島的という物を探れないか。そういう、人の営みの中で文化を形成してきたその文化は一体何なのか、その文化に基づいた今のバリ島の人達はどのような生活をしているのか。それは、いわば日本を始めとする先進国、近代社会においてはある意味ではうらやましい、ある意味ではやっぱり無理かなあという気もするそういう生活なんです、しかしもしかしたらそれが本来の人間の生活かもしれない。その生活が社会というシステムの中に組み込まれていて、巧妙な社会システムがバリ島にある。それがまた自然に戻って行くというですね、そういう物が、ネットワークのように、この図のように線で結んだというのは、それぞれが別々にあるものではなくて、自然と歴史は当然の事、自然と文化、自然と生活、社会と歴史、全部これがですね、関係しながら、うまくデザインされているのが、バリ島なんではないかと思っています。

限られた時間なので、このそれぞれすべてをここでは議

論できないと思いますが、いくつかの切り口という意味では、例えば自然についてはやっぱり自然と人間あるいは人間社会という物について、極めて巧妙な共生の仕組みがバリ島には出来ている。西洋社会、砂漠を元にした西洋社会というのは、自然を克服する、克服するために対決するという所から始まった訳ですが、バリ島は元々自然と人間は共生すべきものだ、共生しなければ生きていけないという所で、非常に巧みな仕組みができています。

これは最初に河合さんの方から特に棚田の水ですか、水利系がどうなっているかという所を切り口にして紹介していただきたいと思います。

それからまた、昨日色々、ネカ美術館等に行きまして感じた、あるいはケチャの歴史等をちょっと調べて感じたんですが、色々な参考書あるいは旅行案内書を見ると、もう、バリの歴史の中で1910年代、20年代、30年代というのはしょっちゅう出てくるんですね。ケチャが出たのもこの頃だし、海外においてコワサスタイルからバトウスタイル、ウブドスタイル、という風になったのもこの頃だし、何かどうもこの時に起きたらしい。それが現在のバリの一つの原型というところちょっと言い過ぎですね、大きなきっかけになったらしい。それは一体何だったのかというのがやっぱり非常に重要だろうということです。

また、文化あるいは思想といった物も良いかも知れませんが、バリを理解するためにはバリ島の2元論という近代社会の2元論とは全く別の2元論という物がある。こういうようなことを時間の許す限りここで議論できたらという風に思っています。幸い河合さんはバリ島については僕の先生で、ほとんど僕の知識は河合さんから得ている感じがしますので、最初に河合さんからお話を聞いてそれを聞いていただいて、マリさんに色々な感想から始まって結構ですし、他の国との関係とかそういう話でも結構ですし色々コメントして頂けたらという風に思っています。

ということで、外で犬が鳴いてるの？　なんか、非常にバリ島的であんまり気にならないのいいですね。東京で周りで何かやっているとすごい気になるんですね。ところがバリ島でね、外で犬が鳴いていたり、それから外でガムランをやっている時に、周りに虫が鳴いていても全然気にならないですね。たぶん、日本にある西洋音楽のホールでちょっとどっかで虫が鳴いてたら、もうそれでその音楽ダメになっちゃうけれども、こういうのはあっても全然気にならないというのが結構です。あの犬がみんなこの会場に入ってきたらどうなるのかというのがありますが、それさえなければ大丈夫だという風に思っています。じゃ河

合さんお願い致します。バトンタッチします。

河合：バリ島について多少なりとも知っているパネリストが必要だということで引っ張り出されましたが、まだ勉強中です。しかもたまたま私は今、筑波大学の博士課程医学研究科で勉強させていただいておまして、その研究室の元教授の小田晋先生と、私が修士の時の指導教官であり、山城組においても指導を受けている山城先生こと大橋力先生という二人の恩師の前で話さなければいけなくなって、非常に緊張しております。私が今勉強させていただいているのは精神生理学で、バリ島のトランス現象について研究しております。しかし、その話題は恩師のお二人の先生が次のセッションで十分に触れると思いますので、別なバリ島の話、今からご紹介いたします。

楽園バリ島のVR技術というテーマでは、私は、2つの典型的なVRシステムがあるのではないかと考えております。まず1番目が、これからご紹介する"ケ"の世界のシステム、水系制御システムです。2番目が"ハレ"の世界のシステムで、祝祭の中のトランスを誘導し制御するシステムです。これは次のセッションで小田、大橋両教授がお話して下さると思います。私は1番目の"ケ"の世界のシステムにおいて、華麗なる楽園を実現するための、もっとも重要で基盤となるVR技術について、ご紹介してみたいと思います。

バリ島は観光地としては、一般にビーチリゾートとして知られています。しかしながら、バリの人たちが元々住みついて生活している所は中部の山岳地帯です。みなさんがお泊まりになっているウブドあたりは、最も典型的なところです。今回そこを選んでお泊まりいただいたのもそういう理由だと思います。美しいライステラスをご覧になったと思いますが、非常に複雑な傾斜の土地に、これほど精緻なテラス状の水田を作ることを可能にしているのは、その背後にある高度な灌漑水利の技術です。

まず水系について大まかにご紹介いたします。〈スライド〉(図1) これは皆さんが昨日登ってご覧になった、中部バリの水瓶、バツール湖というカルデラ湖です。このカルデラ湖に天水が溜まり、それは一度地下に全部しみ込んで、途中で湧き水になって出てきます。このカルデラ湖から実は一筋も川が流れ出していないのですが、筑波大学が放射性同位元素をこの水にシールして、どこからそれが湧いてくるかということ調べました。そうやって、これがバリ島の水源だということを日本人が証明したのですが、以前からバリの人たちは経験的にそれを洞察して、水源であるこの湖のほとりにウルン・ダヌ・バツールという水の女

神を祀った寺院を作っています。

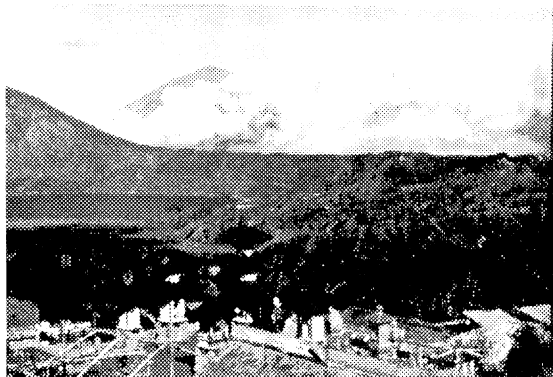


図1 バツール湖という名のカルデラ湖



図2 山の途中の湧き水

<スライド> (図2) これは山の途中で、こんこんと湧き出している美しい湧き水です。このように湧いてきた水が、沢になり、川になっていきます。火山灰の土地であるバリ島では、水が流れれば流れるほど大地はけずられ、深い谷になっていきます。バリの川は非常に急な渓谷になっており、何十メートルという深い谷底に水が流れています。ですから、この水を田に引くためには、水を相当に巧みに堰き止め、分水していかなければなりません。<スライド> (図3) これは最も大きな規模のダムです。ダムの横にあるのは、このダムの神様を祀っているお寺です。<スライド> (図4) 田に近い所になると、もう少し小さな規模の分水施設があります。車で通り過ぎてしまうと気付かないような小さなものですが、このような水利施設が膨大な数、バリ島中にあります。

水田は給水と排水を精緻に制御しなければなりません。これらの施設によって、傾斜地にあるすべての田に適切に

水を回す仕組みができあがっているわけです。<スライド> (図5) そして田の手入れという点でみると、あぜ道の草を、ゴルフ場の芝生のように刈り、その曲線の美をきわめて美しく整えています。これは生産性には直接関係ありません。稲を育てる事だけでなく、美しさを実現するための農作業をも非常に精密に行っています。まさに芸術作品を造る、大地に彫刻するような作業をしているということも見逃せません。こうして水田は、元々の地形を生かしながらも、幾何学的なパターンやフラクタル的なパターンを生みだし、あの息をのむような美しいライステラスが実現しています。お米の生産性よりも美を追求することの方に重きがあるのではないかと思います。

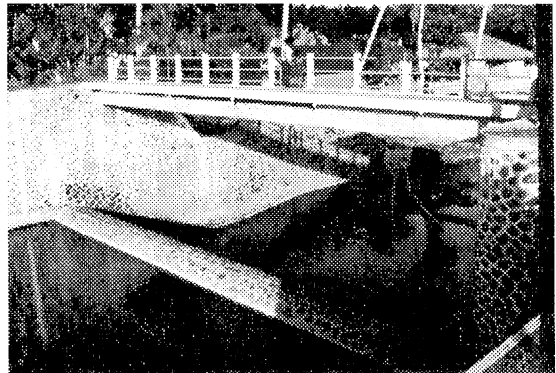


図3 最も大きな規模のダム

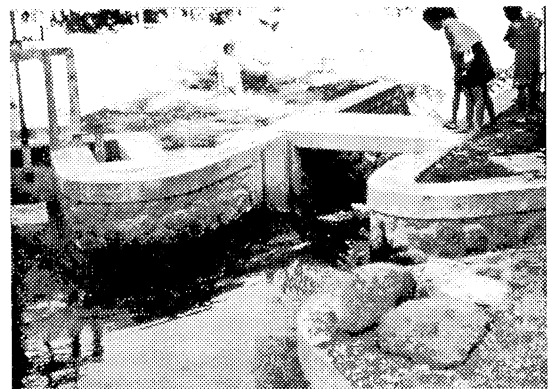


図4 小さな規模の分水施設

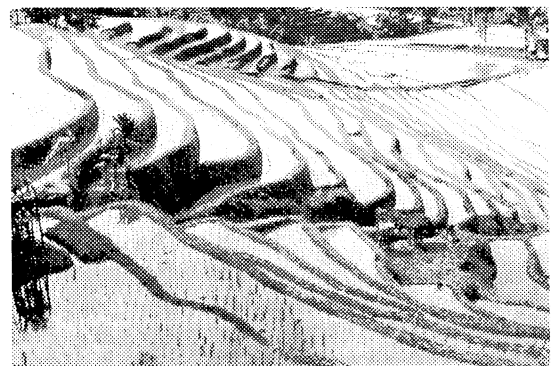


図5 ライステラス

<スライド> (図6) 次に究極の技術を紹介します。尾根のいちばん上に水が入っている水田です。バリの中部には、細かい尾根がたくさんあります。そういう尾根のひとつひとつにも、全部、水田が作られていて、一体どこから水を引いて来るのかという疑問がわいてきます。そこでは谷川をはるか下で、上にため池があるわけでもなく、ポンプで水を揚げているわけでもありません。もう一つの素晴らしい伝統的技術があります。<スライド> (図7) 岩盤を穿って掘り抜いた地下トンネル水路です。あまりに地形が複雑ですから、長い距離に渡って水を引くためには、地表を流すのではなく、地下に延々とトンネルを掘って、なるべく高度を下げずに水を引いているわけです。長いものでは10キロから20キロぐらいの距離の地下水路があります。このように満々と水が流れていて、しかも、まったくゴミもたまっておりません。とてもきれいに掃除がしてあります。これは、スバックという水を共同管理する伝統的水利組織がありまして、そこに属する農民たちが毎日手入れをしています。表からでは直接見えないそういうすばらしい技術によって、あれだけの美しい水田が成り立っています。



図6 究極の水田技術

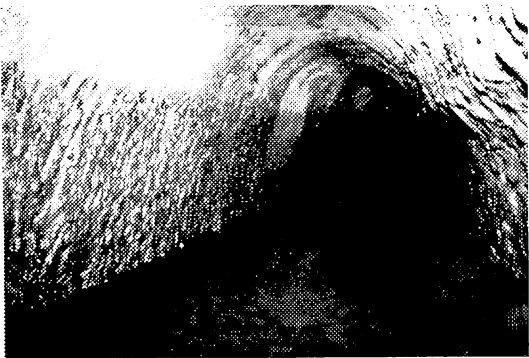


図7 地下トンネル水路

観光でバリを訪れても、その技術はなかなか見られませんが、観光用ではなく、バリ島の若いやインドネシアの他の地域の人々が勉強するための施設として、水利博物館があります。そこにはお話してきたような治水技術を中心

に、バリの伝統的な農業技術について展示紹介してあります。<スライド> (図8) こうした各種の農業用具などが飾ってあります。竹でできた水準器をはじめ、測量技術、土木技術の紹介、そしてスバックという水利組織の基本的な仕組みを紹介しています。それらは9世紀にすでに現在の形がほぼ完成していたと言われており、それ以来伝統的な農業の仕組みの基本はほとんど変わっていません。機械化して近代化するというのもできたのですが、バリ島の場合は、あえて伝統的な方法で美しいライステラスを実現することを意図的に選んでいると言ってもいいと思います。オランダがバリ島を占領してから、ポンプで水を揚げるという近代的な揚水技術も入ってきました。しかしバリ島の水利組合の人たちはそれを選択せず、水が上から下へ流れる自然の法則を利用しています。一部に近代的技術も取り入れてはいますが、自分たちが何世紀にも渡って築き上げてきた伝統的な農業技術のハード・ソフト両面における基本コンセプトはそのまま生かしています。コンクリートの堰だとか、ヨーロッパの近代的技術の中で取り込んでも元々の構造が壊れないような技術についてだけは、自家薬籠中の物にして利用しています。

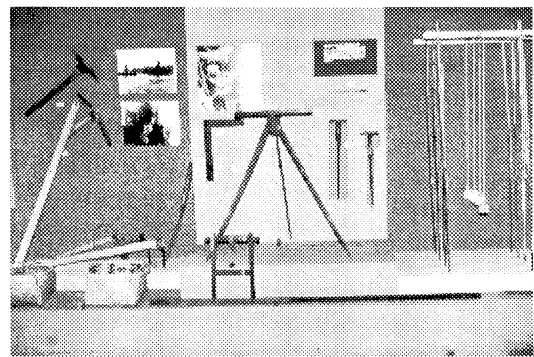


図8 各種の農業用具

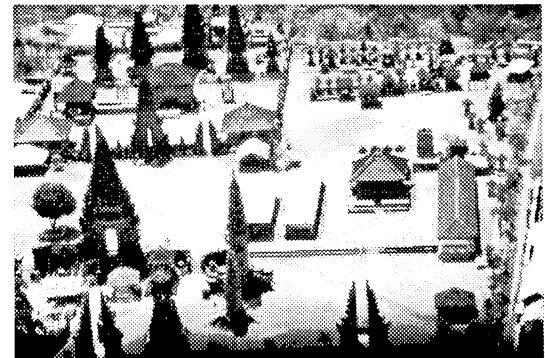


図9 ウルン・ダヌ・バツールの空撮の写真

このバリ島の水利システムの中でもうひとつ重要なものは、そのソフトウェアの技術です。<スライド> (図9) これはみなさんが昨日行かれたウルン・ダヌ・バツールの空撮の写真です。水源のカルデラ湖の女神のお寺なので

すが、この寺の信徒の人たちは、当然ながらその水を利用して全水利組合の人たちです。バツール湖の水を利用する全スパックが連合して、この水源の寺を祀っています。その末社として、各村々にある水利組合ごとのお寺がスパック内の重要な分水施設の近くにありま。先ほどのスライドでダムの隣にお寺がありましたが、あのお寺は、ダムの水を使っている人たち全部が信徒になっています。<スライド> (図10) これは水系の末端、小さい祠で、最後に各水田に水を分けるところに造られています。結局、その水利組合の実態というのはイコール信徒集団、祭りを一緒にやる共同組織でもあるわけです。お米を作っている人たち、一緒にその同じ水を利用している人たちが、お祭りの時には、作ったお米を使って、造形的にも非常に美しいお供え物をお寺にお供えして、水の神を祭るとい祭仲間なのです。



図10 小さな祠

これはバリ島の水利組合の定款です。定款といってももともとは申し合わせで成文化されたものではないのですが、最近、行政の指導により成文化したものも見られます。「組合員は各スパックの間並びに各組合員の間公平に灌漑が行われるよう灌漑の管理をする」というような条文が並んでいますが、その中の4つ目に、「組合員は寺を造り水の神及び稲の神を祭らねばならぬ。植え付け前灌漑の当初において祭を行う」ということが書いてあります。水という点では互いに利害が対立する人たちが、一緒に祭りをやるという形で統合されている所に妙があるわけです。また、バリ島ではデサという日本の大きな村に値する地域共同体があり、その中に、もうすこし小さい、バンジャールと言われるサブシステムとしての集落があります。集落の周りにそれぞれの水田があります。1つの同じ水系の水と一緒に利用している水利組合は、ひとつのデサやバンジャールの中に多数あります。ですから水系がいかに複雑かということも分かります。

例えば、デサ・プリアタンという村には10のバンジャールがありますが、そのうちの1つのバンジャールの中に

は、水利組合が14系統もあります。稲作を営む人々にとっては水が命ですから、水利組合の間では、お互いに水を取り合って争う、葛藤が付きものです。日本でも昔から、お互いに殺し合いになるような深刻な水争いがあったことが知られています。バリ島は、水に関しては、その地形条件において必ずしも恵まれていません。非常に深く切れ込んだ谷から水を引いてきて、みんなで分け合うとなると、文字どおり我田引水が起きます。潜在的には、ものすごく葛藤が大きい社会だと思えます。それを巧妙に回避する仕組みが、水利組合と信徒集団の一体化ということにあります。

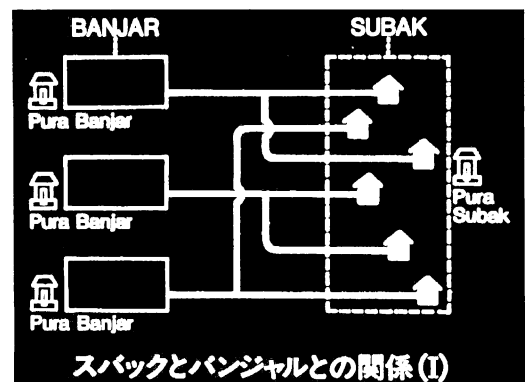


図11 スパックとバンジャールとの関係I

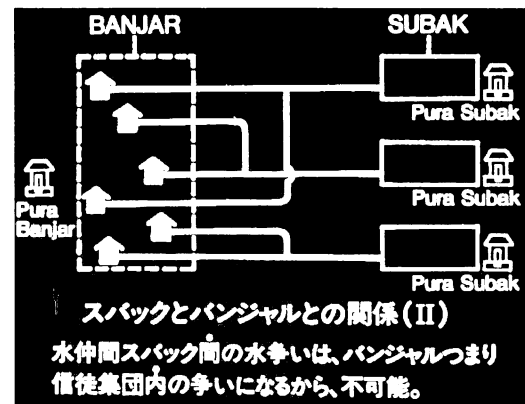


図11 スパックとバンジャールとの関係II

<スライド> (図11、図12) これはその仕組みをモデルにしたものです。村のシステム、バンジャールと水利組合スパックのシステムが、互いに入り組んで二次元にシステム化していることがわかります。村の誰もがどこかのバンジャールに所属しています。そして村で、水田を営む人は平行して水利組合にも必ず属さなければなりません。そうすると、仮に違うバンジャールの間で喧嘩が起ると、1つのスパックの中にさまざまなバンジャールの人が含まれているため、スパックに亀裂が起ることになります。その反対に、スパックとスパック、特に違う水脈の間では、利害対立も厳しく、争いが起りやすいということが

あります。しかし、スパック同士が大きな対立を起こした時に、今度はバンジャールという1つの信徒集団に大きな亀裂が入ってしまいます。バンジャールもスパックも神様を祀っている1つの信徒集団ですから、神様の前では分裂をあらわにする事ができないという抑制が、人間という生物であれば自然にかかるというわけです。それがネガティブフィードバックになって、結果的に争い事が表面化しにくいようになっていきます。

このように、神々と祭りといった超越的・中立的存在を媒体にして、現実的な様々な葛藤を制御していくというのが、バリ島の1つのやり方だと思います。特にこの水の問題というのは非常に理性的・現実的な問題です。そうした問題を解決するのに、祭りという超現実的、感性的世界をつくる共同作業に参加しなければ水がもらえない。そして、その"ハレ"の世界の方は、絢爛たる祝祭世界があり、その快感や陶酔を求めて祭りに自律的に参加するという、もう1つの結集の動機を作っています。仮説ではありますけれども、バリ島は決して恵まれているから楽園なのではなく、こういう仕組みによって実に合理的に楽園を実現しているのではないかと、というふうに考えられます。

原島：どうもありがとうございました。バリ島の、
(テープ停止)

結びついていて、その宗教の中で祭り仲間という共同体というものと、関連してきている先ほど申し上げたバリ島での色々な自然社会、生活というものとは実は別々の物ではないということのお話だったと思います。マリさんこの段階で何かありますか。

マリ：きっと農耕民族というか、そういうお米を耕す民族に本当に必要だった仕組みでもあるでしょうし、アメリカも開拓者時代の時には誰が水を獲得できるかによって、やはりその強さってありましたように、水という物は本当に重要な物だになって、とても分かりやすく教えていただけた感じがしました。

原島：今ちょっと水争いというのがなかなか起こらないように巧妙な仕掛けが出来ているということなんでしょう、もしですね、大きな自然災害が起こるとやっぱりこういう巧妙な仕掛けっていうのも定常的な時はいいけれどもね、何かあると大変だ、そこで崩れてしまうということもあるのではないかと、バリってそういう台風はあまり来な

い？

河合：台風はないですね。

原島：でも、地震はあるけど台風は来ない。

河合：そうです。

原島：日本で言う大飢饉というようなのはあまり無いんですか。どうなんですかその辺。

河合：バトゥール火山が噴火したり、アグン山が噴火したり、というような災害はありました。大きな噴火の時に、火山の周辺で何千人という人たちが亡くなった事もありました。そして、乾季の時の水不足というのは結構あります。例えば今晚皆さんがご覧になるケチャという芸能の元になっているサンヤンという儀式は、水がないような時に行っていた雨ごいの祈りの儀式で、その音楽がケチャの源流になっています。

日常的に自然に対する畏れを持っている敬虔な人たちですから、何か自然の脅威が起こった時には、必ずそういう儀式をして祈るわけですが、物理的に水系のシステム自体が崩れるということは、あまりないと思います。地形が複雑ですから、水脈は非常に多岐に展開しています。多数の水脈から、人工的水路を毛細血管のように張り巡らせているので、1つがだめになっても他で補完できるという事情もあると思います。そういう点でも、遺伝子が強靱ではないかと思っています。

原島：あの自然というものをどう考えるかっていうのはほんとにこれ、国によって全然違いますよね。やはり自然という物は怖いもの、恐いものだと。一生懸命何かを造ってもそれを一瞬にして自然は壊してしまう。大体恐いものという時に、昔 SIMCITY というゲームがありましたよね。SIMCITY で一生懸命に都市を造った時に台風地震が来ると一瞬にしてそれは壊れてしまう。時々ゴジラがやってきて、ゴジラが歩いた所がずーっとババババっとダメになってしまう、というのがあったけれども、やっぱりバリの場合には自然というものは恐いという意識と、もう1つはやっぱり癒しっていうのかな、何かそういう中に自分を溶け込ませて行くという意識、どっちが強いでしょかね。

河合：両方でしょう。

原島：両方あるからうまい事いっている。

河合：そう思います。畏れ、脅威であるけれども、同時に自分たちを抱き取ってくれる癒しの世界。まさに先生がおっしゃった考え方ですね。どちらかに価値を決めつけてしまわない、というのがバリ島の基本的なコスモロジーです。逆に、癒しだけにならないところも凄いですね。自然に対する畏れがなくなった社会は、非常に子供っぽい、人工的なあさはかな人間の知恵と技術だけで何とかしようとする。そうすると、後で自然のしっぺ返しが来るということを我々は経験しているわけです。バリ島の人はある意味ですごく慎重で、非常によくバランスを見て、あるバランスを超えないようにしているような気がします。

原島：ヨーロッパではね、自然というのは基本的にはやっぱり克服すべき物という考えが強いですよ、人間の力によって自然を克服していくという。ヨーロッパは回ると今ほとんど特に平地ですよ。ヨーロッパね平地だけど、昔から平地だったかというところではないはずですよ。昔は森がたっぷりあった。それを確か11世紀から13世紀頃なのかな、農耕革命がヨーロッパに起きて教会および修道院の指導の基に大開墾運動という物が起きたんですよ。ヨーロッパの色々な森を畑に変えていったというので。結果として今のように平地が大分というか本当に何も無い平地が大部分で、所々ぽつんぽつんと森がある、というそういう感じになってきた。それと丁度、対照的な気がするんですけどね。

河合：焼畑と違い、水田農耕は、人間が稲作をやめて撤退しても自然が現状をもっとも早く回復するといいます。農業の問題は別として、そういう点では非常に環境に優しい農業です。もちろん、雨がたっぷり降る自然環境の島だから水田農耕ができるわけで、それができない自然条件もありますから、その点ではバリ島は幸運だったのかも知れません。ただし、先ほどからお話してきましたように、バリ島の水田は、やはりこの地形とこの水環境の中では、決して恵まれているとは言いきれません。水田というのは人間が人為を尽くして造っているもので、大変人工的で、決して自然ではないわけです。しかし、そのテクノロジーのコンセプトはバリ島の発想で、今の科学技術の時代から見ると、環境には優しい。そして美しい。生産性だけではなく快適性や美意識も大変優先している。つまりお米を作って食べるということだけではなく、その景観

が癒しの効果までも持っている。そして、それが非常に厳しい水利組合の掟を基に、人々が秩序立ってあれだけの水系制御をやっていることに裏付けられていることだと思います。ですから、楽園というのは、決してただ遊んでいて出来ているわけではありません。

原島：外から見ている人には楽園、その場でいる人には楽園ではないということかも知れない。いわゆる水田的なやり方とは別に焼畑農業ですよ。ヨーロッパはまさにそうだった訳だけれども。結局、焼畑農業というのは自分の所を開墾し尽くしてしまうとそこからまた別のところに移らなくちゃいけない訳だよ。自分の居る場所を捨てなければいけない。別の所に移るために、元々有限の所を全部開墾、ヨーロッパでは11世紀、13世紀に開墾し尽くしてしまうと、もう外に出ざるを得ない。その後大航海時代というか植民地時代というですね、外へ拡大というのは本質的にあるんですよ。ところが、バリはあまり外へ向けて何か拡大しようとかね、そういうのはあまり聞いてないんだけど。

河合：そうですね、そういう動きはないですね。

原島：その気は無い。有限の所でうまく生きているから拡大の必要が無かった。これがある意味ではバリにとって幸運だったわけね。絶対拡大しようとするやっぱ反発というか逆もあるわけで、外からやられてしまうということ。

河合：やはり小さな島のサイズの中で完結するように仕組みができていますから、外を侵略する必要もなかったでしょうし、むしろ中を成熟させて行く方向にすべてのエネルギーと時間が働いたということでしょうから、そこは恵まれているかも知れません。日本も島国で、そういう点では恵まれている。どこの国にも、どこの自然環境、社会環境にも、恵まれている面とそうでない面があって、バリ島が奇跡的と言われるかもしれませんが、すべてが恵まれているかといえば、先ほどから繰り返していますが、そうではない。そういう部分を見ないと、バリ島の本質が分からないのではないかと思います。

原島：マリさんは色々な国をね、ご覧になってというのが実際に住んでおられていた訳ですけども、このバリというのは特別なかな、それともやっぱり他にやっぱり似たような感じの所とか、どうなんですかね、どういう風にお

考えになりますか。マリさんから見てバリというのは。

マリ：そうですね。私は初めてのバリなんです。他のパシフィックといいますか太平洋地域の国には出掛けて行った事があるので、非常にファミリアな香りであったり、なんか音も含めてそうですし動物とか、自分が置かれている環境が違和感が全く無いんですね。それが何なんだろうと昨日からずっと考えていたんですけど、やはり亜熱帯の国が持つ特性というのが雰囲気として持ち寄ってくるってあると思うんです。

例えば、トンガに行きますとココナツの木1本庭に生えていれば一生お金持ちで生活できる。ココナツによって洋服ができて油が取れて食べ物が取れて、そして洋服も繊維から作ることができるわけで、今日もお昼私達が食べていた時に思い出したのが、トンガの皇太子様の結婚式に行ったときに、一番の私達は新郎新婦の目の前に座っている主賓の人達の前にこういう大きな何というんでしょうかね、台みたいな物の上にココナツとかバナナの葉っぱを引くんです。その上に昨日食べた豚の丸焼き、その味がとっても似ていましたし、新郎がその日の朝採った魚を焼いてお客様に今日のお昼の丸焼きの魚みたいにして出してくれて、それがその新郎の奥さんを食べさせていく力の見本にもなるんですね、示すということで。食べる時、みんな手で食べて食べたものをそのまま置いておくんですね。主賓の次の2番目主賓の前に今度それごと持って行って置くと、一番目の主賓の人達が食べた残りをですね、2番目に食べてそれがだんだん自分達の村の中での自分達の社会的地位の順番に置かれて行くんですよ。一番最後に夜になってパーティが終わるときに見てみたら、豚小屋においてあるの。それを豚が食べているの。だから環境についても非常に考えて何の無駄も無く生活しているという。それがまた豊かさに繋がっているのは先ほども河合さんが仰ったように、結局恵まれているというか食べる事について本当に困らない恵まれというのが、ある意味では他の恵まれよりは一番大事な恵まれ方ではないかと思うんですね。

日本では食べ物には恵まれたかも知れないけれども、近代国家になった時に自給自足をやめたことによってバリのようになれなかった一番大きな原因のような気がします。

原島：今の最後に豚がということで、非常に食べるということに対してシステムが出来ているということなんだけれども。ちょっと言い方を気を付けないといけなんだけど、日本でもね、ホームレスが多い時というのはある意

味では恵まれているんですね。特に都会、東京というのは食べる事に困らない。ホームレスの人にとっては食べる事に困らない所なんですよ。ところが何かそれが社会システムということではなくて、何かやっぱり変な形での流れになってしまっている。もう少しきちんと自分が食べた後も他の人が食べるんだということをね、残す場合でもちゃんと残し方があるというね、あるんじゃないかという気もするんですけどもね。ちょっと話がずれてしまって申し訳ないけれども。それから先ほどね、公平にというのがあったんだけど、ちょっと考えるとバリってヒンズーだよ。ヒンズーって言うとか何か凄いい差別があって、何か公平とは正反対のような印象が外からは見えるんだけど中ではどうなんですか。インドのカースト制という。

河合：私はインドのヒンドゥーにはあまり詳しくないのですが、バリ島のヒンドゥーは、神様の名前がヒンドゥーの名前を冠しているので一応ヒンドゥー教と言われてはいますが、厳密にはインドのヒンドゥーとはかなり違います。バリ・ヒンドゥーとかヒンドゥー・バリと呼ばれています。バリ独特のヒンドゥー教であって、実はオリジナルのヒンドゥー、インドの中でもいろいろ変化をしていますが、それらとは似ても似つかないものになっています。例えばカースト制度の問題でも、バリ島にも4つのゆるやかなカーストがあります。これは、オランダ統治側と組んで、バリ島の高い階級の人が自分たちが、社会を管理しやすくするために、カーストを利用して後から作ったとも言われています。お坊さんのバラモン階級と、王家の王族、王家の兵士、そこまです、いわゆる貴族という言い方をしますけれども、この3つを合わせてもバリ島の人口の10%です。そして平民が90%。オランダが本格的にここに侵入して来た時に、バリ島を懐柔するために、土地の有力者である王家の人たちを利用しました。彼らがオランダの先兵になってバリ島全体を統治するという役割を果たしたときに、4つのカーストを定着させたという説です。

それからバリ・ヒンドゥーという言葉も、ヨーロッパの学者がバリの宗教を調べた時に、神様の名前がヒンドゥーから来ていたのでヒンドゥー教と呼んだ、ということで、バリの人はもともとはヒンドゥーと言っていなかったという説もあります。バリ・ヒンドゥーの実体は八百万（やおよろず）の神を祀るものであって、ヒンドゥー教以外の神様もたくさんいます。デウィ・スリという稲の神様や水の神様は、ヒンドゥーから来たものではありません。土着のアミニズムから来ている神様の名前が、ヒンドゥーの神様

以上に数多くバリ島には見つけられますので、そういう点でもオリジナルのヒンドゥーとは違います。むしろ日本の神道に近いと私は思います。

原島：やっぱりお寺の作り方とかね、意外に神道、むしろ神社に近いですね。

河合：そうです。神の依り代しよがあるのみで、お寺は祭り以外の時には空虚な空間です。中に御神体がないんです。普段は、神様のシンボルもないし、神様それ自体も祭りの日以外にはいないのです。祭りの日、ハレの日に、神様が依り代に天から降りてくるという場所であって、普段は全く空虚な空間。インドのお寺には必ずシバ神などの偶像があって祀られていますけれども、その辺も全然違ってきます。

マリ：今回バリには始めてやって来たんですけども、私自身の分野からしてみるとバリ島ってディズニーランドに似てるんですね。ディズニーランドに似てるって言う言い方は非常に変かも知れませんが、すごく仕組みがですね、ディズニーがバリ島をまねたかどうかは分かりませんが、例えば神々の話になると、ディズニーキャラクターが、その神々みたいな状況で時間になると出て来るとは思いませんか。ディズニーのリゾート地、テーマパークの中で。そこでみんながワッと集まってそこでお祭りをして、その人達が去って行くとまた次の神様が出てきてまた集る。その仕組みがとっても似ています。私達が今生活しているホテルっていうのも非常に何かディズニーリゾートに似ているのは、私達は表向きバリを、つくられたリゾートによって見せられています。私達の汚物はどこに流れていってるのか、私達が海外から持ち込んで来たシャンプーとかそういう物を、シャワーで浴びた時に流した後にそれがどういう風に、この先ほど仰ったすばらしいこの水体系の中に、どうやって処理されていっているのか。トイレ1つ流すにしても紙だってそうですよね。だから私達観光客として見せられている、バーチャルという言い方のバリ島と、私達が実際に見えているバリ島とのギャップってどれくらいあるのかなっていう風にも感じる所があるんです。昨日私達が出掛けていったキンタマニの村に行く途中は、おそらく普段、観光客が通らない所だから、むしろ一番本当のバリに近い風景が昨日ちょっとだけ見れたかなと。けれども、ウブドの中に入って来た途端にディズニーワールドに戻ってきちゃったっていう風な感じが無きにしもあらずで。ただ、ある意味ではそういう観光というものを

を自分達の資源として食べていく術しか無いという風に思うのならば、そういう風にどうやって次の自分達のリアリティを作っていくかというのがとっても重要で、今回のバリ島って私が想像していたバリ島とちょっとギャップがあるのが、何か本当にゴーギャンの絵に出てくるような、私達が昨日美術館で見せて頂いたような風景の方が、本当の私達が想像して来たバリに近いんじゃないのかなということを感じましたね。

原島：バリ島がディズニーランドというのは聞いて面白いなって思って。確かにディズニーランドって楽しいよね。外から来る人にとっては本当に楽しいし、全部非常に巧妙な仕組みがあって出来ている。でもところがディズニーランドで働いている人に聞いたんだけど、あそこで働くというのは結構しんどいと。外の人には非常に楽園なんだけれども、あそこのアルバイトは結構しんどいと。ぬいぐるみの中に1日中居るのは当然としても、全部綺麗にして見せておかなければならないと、ゴミ1ついけないとかいうのがしんどい、それとやっぱり似ている所があるのかなという気がしますね。

マリ：インドネシアの中で一番の働き者はバリ島の女性ですよ、と昨日乗った運転手さんが話してくれました。

原島：働き者、女性が。

マリ：とにかく子供とご主人の事をやったら、次は物を作る、畑を耕す、家事をします。ジャワの女性達とは違う。ジャワの女性達はご主人と子供が出掛けたら今度はおめかしをして、じーっとご主人を待ってるのがジャワの女性達だと。バリ島の女性達は大変だって、一生懸命働くんだなんていう風に。自慢だったかも知れないけれども、話してくれて。あ、そうなんだ。裏方さんが一番そういう舞台の所では大変なんだなと感じました。

原島：何しろ姿勢がいいよね。頭に乗せるということもあるかも知れないけれども。あれバリの男の人はあれができないだって。頭に乗って歩くというのはできない。女性だけ、ほとんど手ぶらでねそのまま当たり前のように歩いている。あれは健康にも良いだろうし、やはりそれは働くということにも関係しているんだろうね。

原島：最初に水という所から、一見恵まれているように見えるけれども、それは決して元々そういう事ではなく

て、バリのシステムの中で巧妙な仕組みができていて結果としてそのように見えているんだと。元々はやっぱり結構厳しいんだということ。かつその時にちょっとカーストの話をした時に、やっぱりバリのそういう色々な仕組みとですね、やっぱり外との関係というのはこれからの日本を考える時に重要になって来ると思うんですね。バリという鎖国だったらね、ある程度できるんだと思うけど、今なかなかその鎖国では居られない。日本もある意味では江戸時代が一番みんな幸せだったんじゃないかという、仕組みとしてはうまくできていたんじゃないかと。ただ、本当に日照りがあつたりね、大飢饉があつたり、大変な時代でもあったとも思うんだけど。それなりに1つの良い仕組みがあつてかつその時代に文化が栄えた訳ですね。江戸時代の文化というのは明治になって開国して外国の人がびっくりするような物があった訳ですね。浮世絵を始めとしてね。これも単なる仮説なんだけれども、日本がなぜ江戸から明治の時に、諸外国に占領されなかったんだらう、植民地にならなかったんだらうというのが、日本の周りの国はほとんど植民地になっちゃったんですね。日本が植民地にならなかったのは、おそらく日本がその前にきちんと鎖国をしていて、非常にいいシステムを持っていた、文化を持っていたからなのではないかと。諸外国、欧米の列強から見た時に、日本はいわば植民地化してしまつてはつまらない。むしろ貿易を有利にして取引をするというのが日本に対しては重要だ。日本から見れば非常に不公平な貿易協定が結ばれた訳だけれども、欧米から見ればむしろ貿易の対象である。日本の文化という物をやっぱり欧米へ、日本の特産物を欧米に持って来る事によって十分やっつけているんだという。その前の江戸時代というのは非常に重要な時代だったんじゃないかという気がしているんですね。日本の場合にはその後の戦後がかなりおかしくなつてしまつたとそう思うんだけど。バリは国際時代になつても、そういう日本の江戸時代のような良い物をうまく維持しているのではないかなと。鎖国だったら閉じた中で非常にうまくやつてる、それは良く分かるんだけど。国際時代においてもそれができているというのがすばらしいなあと思つているんですね。

その時に先ほどちょっと2番目の話題として挙げた、バリのいわば歴史の中でね、ちょうど色々な所で1910年、1930年代というのは非常に面白い時であるということなんだけれども。これはある意味ではバリにとってはある意味危機の時代ですね。この頃というのはね。1900年頃ですかオランダがもう本格的に入ってきた。その前からオランダとの関係は色々あつたかもしれないけれども、

オランダが本当にバリを植民地化しようとして本格的に入ってきたのがだいたい1900年頃で、しかしその後で今のバリの基になっている文化が生まれたというのは一体何なんだという。植民地化されてバリの文化が無くなったんじゃないかと。またそこでバリの文化が生まれたというのは一体何なんだらうかということに非常に興味があるんだけれども。ちょっとその辺説明していただけますか。

河合：私の少ない知識の中からですけど、これまでのお話に関連して考えてみると、歴史的な視点でも、バリ島は決して恵まれてはいなかったという気がするんです。先生が危機の時代とおっしゃつたように、オランダが本格的にバリ島を侵略してきたのが19世紀後半。それ以前は王様を懐柔して間接統治をやつていたんですが、1906年にオランダ軍がサヌールビーチに上陸してきました。もうこれでバリ島は完全に武力で征服されるという、ものすごい危機に陥りまして、今のデンパサールを治めていたバドゥンの王家の人たちは、鉄砲を持ったオランダの軍隊に向かって、クリスという短剣を持って死の行進をしたんです。オランダは次々に向かつてくる人たちを銃撃しましたが、倒れても倒れてもその屍を乗り越えて行進が進んで来るので、オランダ側から何度も密使を出して「もうやめてくれ」と頼んだそうです。でもバリ島の側は民族自決の戦争で、征服されるのであれば死を選ぶという決意でしたから、やめない。いたたまれなくなって、オランダ側が、何度も「やめてくれ」と言つてもやめずに、最終的にはバトリオン王家は、それによって完全に滅びてしまつたんです。ですから今は、その王家の子孫はいません。

それが象徴的なできごとですが、バリ島の場合、自分たちの民族文化を守ることに、日本に比べたらずっと危機感があつたわけです。結果的にオランダは、武力で勝利しても精神力で負けたわけです。バリ島を相手にしたら死ぬ気で戦つて来る、その頃の世界情勢からすると、そこまでの殺戮はオランダにもできない。結局、オランダの植民地下ではあるけれども、バリ島は民族文化を残して、ヒンドゥーのお寺も潰されず、村の共同体のシステムも生かされることになり、結局はバリ島の完全勝利。軍事的には圧倒的に負けたんですけども、文化的には圧倒的にバリ島の勝利となり、これは、今でもバリ島の人々の誇りにもなつているようです。

そして、20世紀に入ってバリ島は、オランダだけでなく、国際的にどんどん開いていく事が必要になって来ました。国際的に開きながらも自分たちの文化をどうやって維持して行こうか、ということで作戦が展開され始めたのが

1910年から30年ごろです。特に36年からピタ・マハ運動がはじまりました。皆さんが今日いらっしゃるホテルがまさにピタ・マハ・ホテルと言いますが、このピタ・マハとは「偉大なる光」という意味で、1936年にウブドの王様が組織した芸術復興運動です。この当時から相当な芸術がありましたから、芸術の国際化、それから芸術を資源にした経済発展、そういうことをひとつの運動体として作っていった、しかもそこにはオランダ人の画家であるルドルフ・ボネなどが一緒に参加したり、といった歴史がありました。そういう国際的なバリ島の民族発展運動というのが今のバリ島の文化の背景にあります。強い遺伝子がどうしてあるのかと河口先生がおっしゃっていましたが、それはさまざまなる危機をのりこえてきた歴史があるから強いんだと私は思っています。

原島：今日は非常に真面目にやっています。僕自身こういう真面目なセッションをきちんとできるんだというのをみんなに見てもらおうというのでやってもらって、見てると河口君だけ寝てた。それとは別にして結局危ない時に特に国を開いた時に何をしたのかというと、外国の真似をする事ではなくて結局自分達で外国に対して輸出できる物、誇れる物は一体なんだろうかというのを探っていく、それがいわばある意味で国際化時代の1900年から始まったバリの国際化が始まった時の戦略だったという、そんな感じがしますよね。日本の場合外国の良い物を持ち込む事が国際化である。日本で今まで昔からあった物は古い、むしろ外国の物を持ち込む事が非常に強かったと思うんだけど、バリの場合にはむしろ逆というのはちょっと言いすぎなんだね、外国から良いのを入れてオランダの画家の人達を迎え入れてそれをうまーくやっぱりバリ化して、バリの中で新しい外国に誇れるものを生み出して行ったというそんな感じがしますよね。実際昨日、ネカ美術館をみなさんご覧になったと思いますけれども、ネカ美術館にはバリのいわばカマサンスタイルから始まった伝統的な物が最初の建物であり、他にインドネシアの画家あるいはあの2階の方だったかな、外国人の絵というのがあるんだけど。正直言って僕から見て外国人の絵は面白くないですよ。単に向こうの人がいわば東洋情緒みたいなので書いたような感じがする。むしろよかったのがカマサンスタイルから、だんだんウブドスタイル、バタンスタイルに変わっていったプロセスの中にすごい面白い絵が出てきた。たぶんそういう外国の影響を受けながら自分達で作って行ったものがすばらしいというのがバリの特徴だと思いますね。

河合：日本人の人のよさに比べるとずっと賢い人たち、したたかな人たちだと思います。

原島：日本でも出来たんだろうと思うんだけど、あるいはその人達がちょっと影で隠れてしまった事なのかも知れないけれどもね。それから後、1900年代ということ言えば、ケチャなんかやはり1920何年？

河合：1933年ですね。

原島：ということですよ。あれは元々はやっぱりこちらに古くから伝わっている儀式用のがあったのかな。

河合：そうです。先ほども言いましたように、日照りが続いてみたり、疫病も昔は流行しましたが、そういう時には神に祈る事しかないわけです。その時サンヤンという呪的な儀式で、その中でトランス現象が非常に多く見られるんですけども、その儀式的背景にずっと流れている男声合唱が、チャッチャッチャツという、4つのビートで作られたケチャのコーラスなんですね。それを音楽を元に作られたのがケチャです。提案したのはウォルター・シュピース。シュピースの事も美術館でご覧になっていると思いますけれども、ドイツ人の画家であり音楽家であり演出家だった方で、1900年代の終わりから太平洋戦争前まで何度もバリ島を訪れて、一時期こちらに住んでいた方です。シュピースを通じてかなりバリ島の文化がヨーロッパに紹介されました。シュピースが、バリ島の素晴らしさを理解していたのですが、そのままのバリ島の儀式、おどろおどろしい呪的な性格の強いものは直接外国人には受け入れられない。行事としては素晴らしく、エンターテインメント的なものもあるし、外国人が観ても非常に感銘を受ける要素があるけれど、やはりディズニーワールド的な演出が必要だ、ということを提案したわけです。サンヤンの中にある合唱のリズムパターンは素晴らしい。それを使って、有名なラーマヤナ物語と結びつけて1時間物のエンターテインメントを作ったらどうですか、という提案をしたら、バリ島の人たちは、それは非常に面白いということですぐに賛成したらしいのです。良いことはすぐに取り込む人たちなので、シュピースの提案によって開発が始まってできあがった、それがケチャです。

まったく同じ時期にバロン劇というものも作られました。バロン劇の原型はチャロナランという、これも非常に神聖な奉納舞踊です。チャロナランでのトランス状態は、

次のセッションでビデオも含めて大橋先生がご紹介すると思います。そこで引き起こされるような本物のトランス現象を、いきなり外国人が見たらびっくりしてしまうので、舞踊や演劇的な要素を抜き出し、ストーリーを簡略化してバロン劇にしました。特にチャロナランの最後に起こるトランスの現象、大勢の人たちがクリスを自分の胸に突き立てる場面は、本物のトランス状態になったらもっとすごいんですけども、バロン劇の中では象徴的に最後にちょっとだけ見せています。バロン劇は、外国人が見て、バリ島の文化をエンターテインメントとして楽しめるし、その中で、例えば善と悪との二つのバランスで世界をとらえるというようなバリ島のコスモロジーの本質的な部分も伝えられるという点で、非常に良くできた劇的パフォーマンスだと思います。その辺の演出、表現は、アマチュアの農民の人たちがやっているとは思えないようなストラテジーがあり、素晴らしいという気がします。

原島：マリさんはケチャは何回か観てますか？

マリ：昨日が全部初めてなんですよ。

原島：バロン劇から始まって。

マリ：バロン劇は私がタイに居たときにインドネシア人の友達が多かったので、よく大使館に呼んで頂いて観たりはしてるしよく学校の発表会などでお友達も踊っていました。だからそういう意味ではファミリアではあったんですけども、あれだけ実際の場所で本場で観るということは初めてで、昨日びっくりしたんです。ただ、先ほどのウォルター・シュピースの話も出ましたけれども、タイでは、ジム・トンプソンという人もそういう人だったんですよ。タイシルクを世界に広めるのにそういう外国人が入って来てという、先ほど出た浮世絵の話も含めてそうですが。浮世絵って元々最初のポルノ輸出だったのですね。だから、そういう意味での自分達の国の輸出で外貨を稼ぐっていう物もどこの国も一時期はやる事が1つのその経済、地域の発展のためにやる事だとは思いますが。

そういう意味では私はバリ島に関してもちろん知識はほとんど無いですが、リゾートとしてのバリ島ということこれから本格的に発展していくということの上で、今回バーチャルリアリティ学会をこちらでやった理由の1つには何だろうっていう風に考えていたんですけども。先ほども言われましたように、今日の河口さんとか川北さんの話の中でも、このバーチャルリアリティという物がどれだ

け本物か、本物であるということ、先ほど原島さんが仰ったようにノミナルはリアルだっていうことなんですけど、私達が普段生活している中でやはりある意味ではバトンタッチの文化だと思うんですよ。1つあるものを次の世代にバトンタッチ。その世代というのは、人間として生きる10年間のスパンとか20年間の世代ということではなく、ある意味では完成された物を次に渡した途端に、もう次の世代になるわけですから。だからコンピュータだって次から次へと次世代が出来て来ると、この速いペースと同じだと思うんですけども。1つの技術が確立した時に次のステップに行くっていうことの中で、バリ島が本当の意味での楽園かということ、ある意味では私達が単なる想像している楽園を芸術も含めた形で現実化してくれてる物だと思うんです。

ディズニー文化をなぜ私がずっと研究して来てるかと言いますと、技術からして生活からしてすべてにおいてのある意味ではリアルなんです。リアルのバーチャルなんですよ。というのは、バーチャルで出来た事が、結局は次にもうそれがリアルになる訳ですよ。だから、バーチャルがなければリアルは有り得ないというのがそのバーチャル。だからよく英語で会話する時に"It's virtually true"って言うんです。本当では無いけれど、VirtualにTrueというのは、もう本質に近いほどTrueであるけれどもTrueでは無い。その0.0000何パーセントに、そこに間違っても良いような、融通をそこに置くという意味でのバーチャルだと思うんです。それを考えた時に、じゃ私達がこういう非日常的なリゾート生活に対してまた癒しの空間に対して何を求めているかということ、癒しっていう物は私達は本当には見えてない訳ですよ。感じる物ですよ。感じる物が本物なのか見ている事が本物なのか、ということでギャップがある訳ですから、だからこそトランスの世界とかそういう物が出てくると思うんです。じゃ私達がバリ島的な感覚を私達が生活している場で自分達の非現実ではない現実の場所に陥った時に何を求めるかということ、おそらくバーチャルだと思うんですよ。リアルじゃないと思うんですよ。そのバーチャルな所に私達がいかに長く居られるかということによって、そういうアメニティとか癒しっていう物がそこに存在するんであって、リアルだったら全部舞台裏だと思うんです。

原島：しかし、先ほど仰っていたように、バーチャルは次の時代のリアルであると。そのある時期バーチャルということであるけれども、それが次の時代でリアルである。また次の時代のリアルの中でバーチャルを求め、それがそ

の次の時代でのリアルになって行くということだと。結構、非常にVR学会を励ます言葉ですよ。バーチャルがなければリアルが無いっていう。VR学会が無ければ次の時代は無い、という。

マリ：ええ、もう1つ思い出したのが、私はアーサー・C・クラークさんをスリランカで取材したことがあるのですが、その時に彼の家に行きましたらですね、サロングを着てシャツを着てそしてもう本だらけの部屋に入っているんです。その家の上にパラボラアンテナがあってそのパラボラアンテナから、まだ冷戦抗争の時期でしたからロシアの放送を見てるんですよ。それを見てサイエンスフィクションの本を書いている訳だから、限りなく彼はバーチャルな生活をしながらも次の世代を読んでいる訳じゃないですか。

今朝のヘラルドトリビューン紙の1面に書いてありましたが、フランスの科学技術省がアメリカ的な科学技術をこれから私達は追いたく無いと。なるべくフランス的な科学技術を追うためにはアーサー・C・クラークのように、サイエンスフィクションを通じて次の世代に何が求められるかを私達の科学技術の中に取り込みたいから、応募をして一般の人々にそういったバーチャルをこうやって声かけてる訳なんですよ。それによって次の世代が自分達が先取りできると思ってるぐらいですから、国ごとやるっていうのもまたすごい事だと思ったんですけども。

原島：今の、バーチャルの話になってきて、このセッションの進め方で、最初バリ島的とは何かという所から、なぜそれが華麗なのか楽園なのかという、バーチャルということがバーチャルの本当の意味を探って行くと、どっかが見えてくると思うんですけども。それがまた近代社会において近代社会という何か話が袈裟になってしまっていて、直接的にはじゃ日本においてそれが可能なかという、そういう話題に少しずつ入って行こうと思うんですけども。マリさんに聞きたいんですけども、やっぱり自分の国の内側にいると自分の国というのは見えないんですよ。基本的に。マリさんはある意味では国籍はアメリカ人であるけれども、今住んでいるのは時間は日本が一番長いですよ。でも外側から見る、日本を見るという見方はトレーニングはされている方じゃないかという気がするんですけども。我々はやっぱりどうしても内側に居るからね、見えにくいんですよ。外側から見て、例えば日本という物を見た時にこういうバリ島的な物を、もう時間が無いので最終的な結論的な質問をしますが可能だと思います

すか。

マリ：日本がですか。いや、さっきも言いましたように、日本の中でバーチャルという物をいかにもっと追求して行くかだと思えるんですよ。だから全部日本が六本木みたいになったら良いとは思いませんけれども、ある意味では、六本木もディズニーランドですよ。そういう所の中に、みなさんが癒しを求めて、夜若者達が六本木とか渋谷とかその辺へ出掛けて行くわけですけども。じゃ、本当の癒しという物を考えた時にバリ島的な楽園を作るには必ずしもバリ島みたいな自然を真似する事では無く、むしろ自分達はその生活をしたい空間をいかに自分達で演出できるかだと思えるんですよ。それが本当に家具の無い1間の中に例えばテレビだけを置いておね、それを通してMatrixと云う映画のように自分のマインドの中に自分の現実がワーストと入って来て、それでそれを自分が体験するけれどももう飽きたら消す事ができるとか。そういう事でもある意味では1つの癒しになる訳じゃないですか。チョイスがあるということが一番重要な事であって、そのチョイスが限りなくあればあるほど私は幸せだと思うんです。ですからそういう点での日本のバリの的なというのなら、バリの様にこうやって限りないチョイスがあるということが重要で、おそらくバリの人達にしてみれば私達は楽園に住んでいるという風には私は思っていないんじゃないかなと。やっぱりそういうギャップというのはどこの国でもどこの文化にもある事です。そういう点では共通している。どちらもチョコチョコにちゃんとオープンになっているんじゃないかなーという感じがしています。

原島：河合さん、バリを色々調べていて、一方でやっぱり日本を見る事があると思うんですけども。

河合：最後の難しい課題なんですけども、バリ島的ということであればできると思います。

原島：そうです。バリ島では無い。バリ島をそのままね、すべての文化をそのまま買って日本と全とつかえなんてのはそれは出来ない訳だから、あくまでバリの。的というのは何かって言うのは、やっぱり最後までこのセッションの課題だと思うんですけどもね。

河合：やっぱり置かれている条件も違いますし、まったく同じ事は絶対に出来ません。でもバリ島的というのは非常に重要な事だと思うんですよ。バリ島は、もちろん豊

かな自然もありますが、結局は非常に人工的な世界だと思えます。決して機械技術や電子技術は使っていないけれども、ものすごく人為、人智の尽くされたテクノロジーやノウハウをバリ島は蓄積していて、それが私たちにとっては大変にお手本になると思えます。ですから、それをお手本にしてバリ島的な物を作ったら絶対にできると私は思います。そのポイントは、非常に人工的にやっているだけども、結果として出来あがっているのは、人間にとって非常に自然に感じられる物なんです。それはなぜか、と考えると、大橋先生の説に照らすと簡単に解答が与えられるんですけども、やはり人間の遺伝子に合った素直な物を作っているから、ということではないかという気がします。経験的に彼らがそれを学んできて、一生懸命皆で力を合わせて作ってきた、長い歴史、伝統を踏まえると、人間の遺伝子に合っていない物は淘汰されてなくなり、合った物が生き残るといったこともあると思います。そういう意味で強い遺伝子が生き残って来ていると思います。ただ、バリ島の人にはすごく遺伝子を素直に読み取るのがうまいです。非常に自然に感じられる物を人工的に作るという技には大変長けています。今の日本人はそういう感性が失われているあるいはゆがめられている所があると思うので、バリ島をお手本にしたらVR技術もうまく行くのではないかと思います。VR技術も、結局は遺伝子に合わない物をいくら作っても定着しないのではないのでしょうか。そういう点で、バリ島の発想をお手本にすれば、日本にも素晴らしいバリ島の楽園ができるのではないかと考えています。

原島：バリ島のという意味でね僕がやっぱりあこがれている事があって、最初に来た時かなバリ島に来た時にこれは河合さんにあるいは聞いたのかも知れない。バリ島の人にあなたの職業は何ですかと聞いてもピンと来ないと。職業と言った時に何の事がよく分からないと。じゃあ、あなたはどのような生活をしていますかという質問をすると、朝から午前中は自分が食べるために、自分が生きていくために私は農業をしています。働いていますと。自分が食べるために午前中は働いていますと。じゃ午後は何かというと、ある意味では自分を表現するために、私の村では音楽です、私の村では彫刻です。それはたぶん、単なる表現というより副収入にはなっていると思うんですけども、やっぱりそれ

は世界に向けて場合によっては自分を表現しているという、輸出という意味でね。やっぱり、そういう自分自身の表現のために使っています。午後はそういう時間です。夜は何かというと祭りです。お祭りというのは何かというと、先ほどまさにその水利組合の祭り仲間という話があったんだけど、まさに共同体としての催し物ですよ。祭りということ、祭りに参加するというのは、自分が共同体の一員として責任を持つということで。そうすると、午前中は生きるため食べるため、午後は自分を表現するため、夜は共同体の一員として生きるという。これはすばらしい生き方だと思うんですけども。できれば僕もねやりたい、日本でやりたいと思っているのは、午前中は食べるために、もうちゃんと大学教授としてのあるいはそれに付随した色々な物をマルチメディアを徹底的に駆使してね、効率的にどんどんどんどん仕事をしてしまう。午後は自分を表現する事に使いたい。僕はそういう表現という意味ではマルチメディアは嫌いですからね。生で表現したい人間ですからね。マルチメディアはすべて切ってしまう。電話も掛からないようにしてしまう。自分の好きな事を自分を表現するために

朝8:30 出発、~~バリ島の芸人へ~~ VR文化フェスティバル本番。
 VR学会事務局 田中さん、小山さんと受付、トイレの案内（お土産式）、セッション10。
 大瀬と森セイ、河合さん、ゴジウや川北さんと、モスロとゴジウのお宝映像を早く盛り上げる
 も、いざいざのニワトリイナキに邪魔される。芸人さんが、さる Bali。
 フグ、原島セイ、河合さん（半熊山城組）、よりイリスアスさんのセッションでは、
 ニワトリだけ早く、早すぎた大感かしていいと。
 セッション11「あまのふのサイム 大瀬と河合さん」
 無視され、見做ら「おつろはねておつろ」のサイムを出す。
 「あまのふの出方がある！」と岩田セイ利指導。ツライ。
 原島セイイムは美しい時間通り。サロンのセイと子英
 を撮るが、田中さんと小山さんのあまのふで、関根と菊山で急に
 モデル年増で押上げてて、たいへん気もなりました。
 仁科さん、おつろはねておつろ、伊藤部、大橋、小田重、各々の
 のセッションも前半終了。2時間ほどに届。皆、手を洗ったべよ。
 夜2回はサロンのシラクなバスターにて、清水谷と見だすっ皆で夜バスター。
 若い者に比べて、ハゲと親しかった。案に相違して
 トランス状態は出現しませんでした。草原さんと、ガルーダ
 徐の原地人と写真とりまくる。岩田セイは360°パノラマで
 ナビで写真占撮り、いいねとわけておきたいです。
 明日のアクションを何にするか打合せして、解散式。70分
 もいて、皆集まりいへんお疲れです。ト
 エスターに誘ったのは、草原さんが「ハゲはグループに変更。
 グループが少人数でライブ成立したいかと思、
 も見だすべさだ」とのアドバイスで「おつろ7月11日、朝、マテットル
 バサールで、原、バリエスター、午後原島がバサールを見せました。
 グループにしたいと河合さんに「エスター？三日しか
 持たない」「おつろを毛お出さあ？」とぼやくも
 に入り、そんな言ったらグループに早くおつろを」と思う。
 関根さんから、アツの自立にヘアスタイリスト水着でかりて、正確かに
 バリに来る海に行きたいと思...

使う。夜は共同体のために酒を飲むというね。こりゃあやっぱりすばらしい生活ですよ。みんなの周りの人のために酒を飲むというのはね。考えてみたらこれはね、何か今の人はみんな笑っているけども本来の姿ではないかと。今ほとんど我々はね、大部分の時間がある意味では食べるために使ってしまった、自分を表現する時間がほとんど無い、あるいは共同体のために使う時間も無い家族のために使う時間も無くなってしまっているというね。食べるため、本来午前中にすべき物をもう全部の時間やって、食べるために休養が必要だからそのために休日があるという、ほとんどそれだけになってしまっているというのは、何か悲しい事のような気がするんですよ。たぶん我々はこの20世紀に生きていて、非常に恵まれたような意識になっているけれども、もしかしたら23世紀、24世紀の人達は20世紀の人達の生活ぶりを見て、なんと可愛そうな時代だったのか自分のために全く時間を使っていないじゃないか、使わないうちにそれに気づかず死んで行ったというね、そういう風に思うんじゃないかとやっぱり思うんですよ。やっぱりね、そこで本来の姿。午前食べるために働き、午後自己表現、夜共同体、というのをやっぱりどこかで出して行かなければならない。これは競争世界の中でなかなか厳しいんだけどね、そういう生活があるということを知る事が重要だと思うんですよ。たぶん、ほとんどの日本人というか現代人は今生きている生き方が当たり前だとそれしか無いんだと、それ以外の生き方を場合によっては怠けているんだと。大橋先生なんか、日本の感覚から言えば完全に怠けていらっしゃるんだけど、そういう風に今は1つこれしか無いんだと思ひ込んでるんで無いかと思うんですよ。そうじゃないんだ別の生き方というのがあるんだと。場合によっては欧米的な豊かさとか欧米的な豊かさという意味では、バリ島なんかはまだまだ貧しいけれども、やっぱりその精神的な色々な本当の人間の豊かさという意味では、むしろバリ島の方が豊かなのかも知れない。というのをね知るといって、事がやっぱり重要だと思うんですよ。日本人は僕結構ね、やっぱり僕自身は信用していて優れた人達がたくさん居ると思って適応性や新たな物を作るという能力があると思うんだけど。今一番問題なのは、先ほどの色々な選択肢チョイスがあるということを知らないということだと思うんですよ。これしかないと思ひ込んでしまっている。アメリカにどんどんインターネット、インターネットと、これからは情報化の時代だ、21世紀はマルチメディアを知らない生き残って行けないよっていう風に言われると、もうそれしか無いって風には選択肢が無くなって

しまっていてみんな同じ方向に行っちゃうという方が問題で、色々な選択肢があるということを知る。やっぱりバリの島という選択肢もある。別に日本がそれを選択する必要は無いと思う。絶対それを選択しなければいけないって事は無いと思うんだけど、少なくとも選択肢があるというのを知っているというのは、かなり本質なんじゃないかと個人的には思っています。

河合：それはもうおっしゃる通りで、「大学教授はアルバイトで、本来の職業は僕にはありません」というほうが良いのではないのでしょうか。私がバリ島の方に職業をお聞きした時の話は、正確に言うところなんです。「あなたの職業は何ですか」と聞いたのですが、「えっ」とか言って答えてくれない。なかなか答えがなくてこないで、「農業ですか」と聞き直したら、「えっ、農業は職業じゃないよ、はははははっ」と笑われてしまつてとても恥ずかしい思いをしました。つまり、水田を作るということは仕事ではないわけです。生きて行く事その物かも知れないし、当たり前前の習慣なのかもしれません。最近、観光業に携わってホテルで働いているとか、コックさんをやってるという人なら「職業はこれですよ」と言いますが、ただ、その人達も家では農業をやっているんです。考え方が全く違って。バリ島では日本のように、生活のために、本当に脅迫的な心境で一生懸命働かなければいけないということがありません。農業をやれば食べてはいける。それはバリ島社会のベースとなっている豊かさでもあるわけですが、私が衝撃を受けたのは、物事のとらえ方です。ですから、苦しい事をこれが生きていくための職業と違って無理してやるのはもう止めよう、と私も思いました。

原島：さっき、午前働き、午後自己表現、夜酒を呑むというのが理想だと言ったんだけど、一番日本でその逆の生活をしているのは僕なんじゃないかという気がして。だんだん時間が無くなって来ました。マリさん、少しまとめたあるいは感想的な最後に何か無いですか。

マリ：まとめを、といっても今回は何だかハイテクとローテクが入り混じったような会議に参加させて頂いて大変うれしかったのと、やはりこうやって皆さんと出掛けてくると、ああ色々な職業ってあるんだなあ。何人かの皆様方とお話させて頂いたんですけど、中には何度かいらっしやった事がある方もいらっしやいましたし、むしろ先生の方が情報不足じゃないかと思うのはこれだけチョイスがあるというのは皆様方がよく知っていらっしやって、む

しろハイテクやりながらこういうローテクな所で楽しんでいらっしやる方もいますし。ただ私はバランスっていうのはバリ島の人達の一番の特徴だと、先ほど河合さんが仰いましたけれども、私達の東京での生活もバランスだと思うんですよ。どうやって自分達が持っている特性を得意の文化の中でそういう自分達のライフスタイルを作って行けるかっていうこともとっても大事で、働くことが楽しい人もいると思うんです。

原島：自分を表現する中にね、働くというのが自分の表現だっていう人、これは居たって良いし非常に大切な事です。

マリ：また大橋先生のように、羨ましい限りで、何ヶ月間かバリ島にいらして、後は日本でお仕事されるっていうのもすばらしいなうらやましいなと思いますけれども、とっても大事だと思うのは、いわゆるいろんな物を混ぜる事ができる。私は日本で生活して一番何か威圧感を感じていたのは、何か何年も同じ事をずーっとしてなければその専門家じゃ無いとか本物じゃ無いとかって言う。そうじゃなくて、やはり1つの事を知る事がとっても大事ですけども、横のつながりを1つのラインで結ぶって言うことがどれだけそれが、生きて来るかっていうことも分からなければいけないんじゃないかなと思うので、やはりバランスというのが最後のまとめというのなら、バリの的じゃないかなあという感じがしました。

原島：河合さん何か。

河合：もうほとんどお話することはないのですが、先ほどの遺伝子に合わせたバリ島のVR技術について補足しておく、キーワードは、快感ではないかと思っています。結局、心地よいかどうかすべてではないでしょうか。まさに、楽園バリ島のキーコンセプトです。人間は遺伝子に合っていない場合は不快に思うように、生物としてできていますので。ただし、細かくいうと、恐怖というものも、快感と一体化しているところがありまして、ディズニーランドへ行っても怖い乗り物にも乗りたいという欲望があります。バリ島の場合には、パフォーマンスにおいて、そこまで読んでいる。例えば呪的な儀式的

中で怖い場面はけっこう意図的につくられている。村の子供たちから、何度も見ている大人でも、みんな本気で怖がって見ているわけです。なぜ見ているかといえば、怖いもの見たさで快感だから見ている。そのメカニズムを次のセッションで解明していただくという狙いの元に、バリ島のバーチャルリアリティのキーワードは快感、ということで終わらせていただきます。

原島：ありがとうございます。このセッション、私にとっても非常に快感でした。美女2人の間に入ってという快感。それも、今あったように、やっぱり恐怖と一体となった快感。やっぱり、これこそ本物なのかと思いました。また、こういうのは機会を改めて設けたいと思いますし、また、この後もっと快感、トランスというですね、さらに快感へつなげて行くセッションがごさいます。15:10までということではほぼ正確に終わっていると思います。どうも長い時間、ありがとうございます。また、マリさん、河合さん、ありがとうございます。これで……。

5/2 朝 7:00 起床。バザールへ行く。exNTTの遠藤さんご挨拶。イブニングにバリに
くおしく、本日もご親切に案内してもらいます。

夏休みにはドラゴンを置くため、バザールまでお越しください。Baby God とおぼやかし、ウリがゴロの上にうずくまるといふと見つけろ。飛ぶかたは、ドラゴンを捕まえる。

竹田さんに買ってもらった、ゴロ、ネコ、などのお土産を。この本物のドラゴンもGetした。石原先生の犬はBaby God 7:00に到着。Baby God はお解りなせんり。バザールはごきげんも売り物も一掃で、アヒルも結構。絵にも猫やアヒルを型どったBaby God をお祝い。皆が来る中、竹田先生は上機嫌で言葉に。10時半、HP(セント・パウル・ド・ソサエテ)吉田さんと待ち合わせ、皆でエステへ。

バリエーションで、Tofuのメニューで前評判高し。遠藤さんも、HP吉田さんと一緒の0年おぼやかし。おぼやかし、関係はなぜか二人組でメニューを。9-11のグロート、ゴロ、メニューでおぼやかし「至福」に似たもので、二人とも一緒にアワバスにぶちこまれる。なぜか？よく考えると、初体験のために、同じ小学校、高校、大学の判明し、しるしにはなぜか裸で同じバスにぶちこまれるという、遠藤さんといふおぼやかし。一生おぼやかしせん。

ゴロをエステ組(名合)でたば、森山は7:00に先にたかられ、魚心にたばしてたら、前川セイ(同村大、本業教師)にたかられた。そのあとホテル別に降り降り、シャトルバスに乗ろうとたら乗車！あつという向に運ばりにたり、今夜やろ、再びアワバスが水没。遠藤さんexNTTが、イブニングにシャトルバスをたばせ、命からがらホテルへ戻りた。6時には皆出陣され、森山は一人見送った。たばせ、思いもよることいばせ。バ、おぼやかしは立ち回り、ホテルの運転手から情報を知り出し、単身、夜のワヤン(彩絵)上機へ向かいた。おぼやかしはたばせせん。

遠藤さんのサルくん(本名)は、ワヤンのせりがおぼやかし。たばせか聞いてたら、後の本は劇場のとなりで、毎晩全部きこえるからたばせ。ワヤンはジワワと大違い。若はヨーロッパはたばせ。客に有名なロックマンおぼやかし、森山がたばせ判りた。たばせの「おぼやかしさん! (by さん)」と日本語で怒らた。後はたばせをたばせた。おぼやかしはたばせた。おぼやかしはたばせた。